

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13524

研究課題名（和文）大名家臣団における藩政運営能力の形成・蓄積に関する基礎的研究 久留里藩を事例に

研究課題名（英文）The formation and accumulation of political and administrative capability of retainers of feudal domains

研究代表者

小関 悠一郎 (Koseki, Yuichiro)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：20636071

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、田丸家文書・森家諸留などの久留里藩士の家文書、および久留里藩領村方文書の史料調査を実施した。諸文書の分析の結果、19世紀の久留里藩では、中下級の藩士たちが民政の経験や学問の受容を通じて政治的・行政的能力を高め、幕末維新期の藩政の担い手となったことを明らかにした。本研究の成果を広く利用に供するため、論説編・史料編・目録編からなる研究報告書にまとめ、印刷刊行した（小関悠一郎・上総古文書の会編『久留里藩における藩政運営能力の形成と蓄積』、総ページ数339頁）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、上総国久留里藩の政治・行政の担い手と彼らの民政への取り組みや学問受容のあり方を解明したものである。これまで研究が手薄になっていた譜代中小藩について、家臣団における藩政運営能力の形成と蓄積という観点からアプローチする方法を提示した点で、学術的な意義を有している。また、本研究では、地元の研究団体や千葉歴史・自然資料救済ネットワークと連携して、久留里藩に関する新たな史料を掘り起こし、その内容を報告書にまとめて刊行した。災害などによる地域史料の滅失防止が社会的課題となる中、本研究のような取り組みには、大きな社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, we surveyed the documents of Tamaru family, Mori family and others who were retainers of Kururi domain and the documents of village officers of Kururi domain. We analyzed these documents of retainers and found the following facts. In the 19th century, the middle or lower class retainers of Kururi domain had heightened their political and administrative capability through administrative experience and acceptance of learning. And they had become leaders of politic and administration of Kururi domain. We published research report consisting of papers, historical materials and catalogs for making the results of this study available to the public.

研究分野：日本近世史

キーワード：久留里藩 家臣団 代官 民政 学問 公議人

1. 研究開始当初の背景

近年の日本近世史研究においては、一国史的な研究枠組みへの批判や地域秩序をめぐる諸問題を念頭に東アジア世界に目を向け、朱子学的支配体制を実現した近世の中国・朝鮮と異なって、武士により「武威」に基づく支配体制が出現した近世日本の「政治文化」の特質が追究されるようになった(「東アジア近世」論)。こうした東アジア近世論の主要な論点の一つが、近世日本における儒学をはじめとする学問の受容、及びそれと民政のあり方との関連である。

こうした比較史的観点から、幕藩領主層をはじめとする諸階層が、軍書や農書・経世書などの書物を通じて、「仁政」論的主体を形成することが明らかにされてきた。儒学については、藩校の急増等に見られるように、その政治的・社会的影響力の高まりが顕著となった18世紀半ば以降が焦点とされつつある。とりわけ、近世中後期の幕藩政治改革において、改革政治や藩政運営の担い手がいかに学問・知識を受容して政策主体を形成したかという点をめぐり、幕末維新期にかけての展望を交えた議論が蓄積されつつある(金森正也『藩政改革と地域社会』2011年、小川和也『牧民の思想』2008年、小関悠一郎『明君の近世』2012年等)。これらの研究は、東アジア世界の中で日本の近世・近代の史的特質・展開を問題とする際、近世中後期の武士と学問・政治との関係への着眼が大きな意義を持つことを示している。

その一方で、この期の武士と学問・政治との関係を総体的に理解しようとするれば、学問受容や改革政治の展開が顕著な事例にとどまらない事例の蓄積が重要である。例えば、いわゆる譜代小藩の家臣団については、従来注目されてきた国持大名クラスの外様藩の家臣団とは、(幕府との関係や所領規模の違いによって)置かれた環境や直面した課題は大きく異なっていたと見られる。そうであるとすれば、これまで研究が手薄だった譜代小藩の家臣団の事例に目を向けることで、近世日本の支配者層としての武士の特質に新たな光を当てることができるのではないかと。

こうした問題設定は、多様な藩役職の特性や藩士各層における政策主体の形成を明らかにしてきた2000年代以降の藩研究(岡山藩研究会『藩世界の意識と関係』2000年、渡辺尚志・小関悠一郎編『藩地域の政策主体と藩政』2008年等)、中間支配機構が藩の政策立案過程に果たした役割を論点として譜代藩・小藩に目を向けつつある地域社会論などの研究動向と密接に関連するものといえよう。多くの研究者が関心を寄せ始めた中、藩の多様性を踏まえて、民政はじめ藩政の諸側面に目を向け、藩政運営の中核的な担い手としての家臣団が、いかにしてその力量を獲得・蓄積し、発揮していくのか、新たな研究が求められている。

以上の成果は、近世中後期の藩政の展開を捉える上で、かつての藩政改革論にみられた、有能な家臣の登用による改革の実施といった概括的な理解にとどめず、藩政を担う家臣団(個々の家臣)における政策能力の獲得と実践の過程に踏み込んだ考察の重要性、同時に、特に近世中後期には、学問・知識(書物の受容や学者の招聘、記録編纂等を通じた藩政知識の継承等)が、家臣団における政策能力の獲得と藩政の展開に極めて大きな意味を持ったことを示している。

ただし一方で、上記の成果は、改革政治の展開が顕著な国持大名クラスの外様藩を事例としている点、領内民政に主眼を置いた分析となっている点で、より総合的な藩政担当者層の特性把握や一般化に向けて課題を残している。すなわち、成立過程や規模・地理的要因、再生産構造などによる藩の多様性に留意した研究は課題として残されている。特に、幕府との関係や藩領規模の小さい譜代藩・小藩については、藩政が直面した課題やその担い手を取り巻く環境も自ずと異なっているものと見られる。したがって、これまで研究が立ち遅れてきた譜代小藩の家臣団における藩政運営能力の獲得・蓄積について、学問・知識の受容や継承を指標に、領内民政にとどまらない諸側面をも重視して考察することが重要となる。このことを通じて、近世中後期の藩政とその理念の展開の総合的考察をも可能とするものであろう。

2. 研究の目的

以上から本研究では、千葉歴史・自然資料救済ネットワークの活動に参加するなかで家臣文書が発見されたことを契機として、18世紀に入って成立した典型的な徳川取立大名とも言われる黒田氏治下の譜代小藩久留里藩(三万石)を対象に研究を進めることとした。

久留里藩については、筑紫敏夫による一連の研究(筑紫1983・1985・2003)が現時点での研究の水準を示している。そこでは、主として藩重臣の家に生まれ幕末期以降活躍した森勝蔵の編纂記録に依拠して、18C段階における黒田氏家臣団の形成、大坂加番等の幕府課役の遂行、寛政期の財政改革、房総の海防、これらが論点として示されてきた。

本研究ではこうした成果を踏まえ、以下の諸点を明らかにすることを目標としたい。(1)久留里藩研究の基礎史料である森勝蔵の編纂記録の全容把握とその解析。海防や藩財政・民政や教育をめぐる久留里藩政とその理念の展開過程を押さえるとともに、森が参照した藩政記録とその成立・伝来事情について解明することで、久留里藩における藩政知識の蓄積と継承について明らかにする。(2)従来行われてこなかった個々の藩士家に伝来した文書・記録・蔵書史料の整理と分析。系譜類や役職に関する留帳類、書籍・和歌関係等の諸史料の分析によって、学問・知識の受容やそれをめぐる人的関係を解明し、それが藩政運営にどうつながり活かされていくのかを明らかにする。

これによって、幕府課役の遂行・家臣団を含む大名家の再生産・領内の民政を果たしうる家臣団の文武の素養や発揮される力量、およびその総体を藩政運営能力と呼び、学問・知識の受容やそれに基づいた記録編纂に着目して、その形成と蓄積の実態を解明する。

3. 研究の方法

(1) 久留里藩士田丸家文書の整理と解読・翻字

田丸家文書は、千葉歴史・自然資料救済ネットワークの活動の過程で発見された旧久留里藩士の家に伝来した史料(約1,000点)で、平成27年から同ネットと連携して千葉大学教育学部で目録作成・写真撮影等による史料整理を行ってきた(うち約900点について仮目録作成済、半数程度写真撮影済)。本研究では、引き続き上記の連携の下に、現地所在史料の追加調査・目録作成・写真撮影を継続して、史料整理を完了させ、古文書等の解読を進める計画である。古文書の解読にあたっては、上総古文書の会(君津市・渡辺代表)の協力を得る。

(2) 森勝蔵編纂記録の調査(東京大学史料編纂所)

久留里藩研究の基礎史料である森勝蔵の編纂記録については、その一部分が千葉県および上総古文書の会によって翻刻・活字化されている(『久留里藩制一斑 千葉県史料』千葉県、1990年、『雨城迺一滴』上総古文書の会、2009年等)。一方で、東京大学史料編纂所所蔵の「森家諸留」(森勝蔵編、原本42冊、維新史料引継本-Iほ-714)については、これまでほとんど取り上げられてこなかった。そこで本研究では、「森家諸留」の調査と分析を実施し、それを軸に、久留里城址資料館・上総古文書の会の協力を得て、既刊史料についても精査を加え(久留里城址資料館保管原本の調査も実施)、森勝蔵の編纂記録の全容把握とその解析を行う。

(3) 久留里藩関係諸史料の調査

本研究の遂行にあたっては、史料の残存状況から見て、久留里城址資料館収蔵武家文書(森勝蔵編纂史料・杉浦家文書等)、久留里藩領村方文書(君津市西原・吉田家文書等)、藩内外の学者等(儒学者・吉田竹窓・鷲津毅堂ら)に関する諸史料によって、実証面での肉付け作業を行うことが必要になることが想定される。本年度は、上記1・2の作業を優先的に行うものとするが、これらの史料所在の把握を進めるとともに、それに基づく現地調査にも着手したい(久留里城址資料館収蔵武家文書からの着手を想定)。

4. 研究成果

(1) 主な活動と研究内容について

本研究は、上総古文書の会のメンバーとの研究打合せ、史料調査を重ねることを通して実施したものである。本研究による主な活動を以下に掲げておく。

<主な活動一覧>

- 二〇一七年五月八日 史料調査(東京大学史料編纂所)
- 二〇一七年五月一二日 研究打合せ(久留里城址資料館)
- 二〇一七年一月七日 史料調査(君津市田丸家)
- 二〇一七年一月二五日 研究打合せ(久留里城址資料館)
- 二〇一八年三月八日 史料調査(君津市立図書館)・研究打合せ(君津市周南公民館)
- 二〇一八年三月一二日 史料調査(飯能市郷土館)
- 二〇一八年六月二五日 研究打合せ(久留里城址資料館)
- 二〇一八年七月九日 史料調査(飯能市能仁寺)
- 二〇一八年八月七日 史料調査(木更津市小川家)
- 二〇一八年一〇月二〇日 久留里城址資料館平成三〇年度企画展関連講座(小関講演)
- 二〇一九年二月一八日 研究打合せ・史料調査(ともに久留里城址資料館)
- 二〇一九年三月一八日 史料調査(市原市埋蔵文化財センター)
- 二〇一九年七月二九日 研究打合せ(久留里城址資料館)
- 二〇一九年一月一九日 史料調査(茂原市某所)

本研究ではこれらの活動を通して、旧久留里藩士の諸家文書の解読と内容分析、東京大学史料編纂所所蔵「森家諸留」四二冊(久留里藩士森勝蔵編)の解読と分析、久留里藩領村方文書の現地史料調査と内容分析、以上を主として実施した。

まずで本研究の中心的な対象としたのは田丸家で、同家は久留里移封時に足軽として黒田氏に仕え、以後代々にわたり、代官等の役方の職を精勤して藩内での格を高め、明治初年には久留里藩の公議人に選出された家である。田丸家文書について本研究では、撮影・目録作成・重要史料の解読を行った。その成果は本報告書各編の内容の中核をなしている。また、本研究では、新出史料として杉浦家文書(久留里城址資料館収蔵)も取り上げた。杉浦家は代々藩の家老を勤めた家柄で、新出史料の中には藩祖黒田直邦に関する史料や幕末期の久留里藩の動きを知りうる史料などが含まれ、久留里藩研究にとって貴重な史料である。本研究では同家文書についても撮影・目録作成・重要史料の解読を実施した。加えて、田丸家同様に代官役等を勤め代官として作成した諸帳簿や書籍類などが残されている粕谷家文書(同館収蔵)についても研究の対象とし、撮影・目録作成(仮目録のデータ入力)・重要史料の解読を実施した。

以上の諸史料の撮影・目録作成・解読は、上総古文書の会メンバー、及び三村昌司・白石烈の

両氏の協力を得た。なお、これらの成果の一端は、小関悠一郎「江戸時代の政治と武士の学び」(『歴史評論』八一三、二〇一八年) 久留里城址資料館平成三〇年度企画展 明治一五〇年記念展「久留里藩の記憶と象徴の行方」関連講座講演(小関「幕末維新期の久留里藩と武士の学び」)などで発表した。

次に「森家諸留」の解読と分析については、「森家諸留」が、久留里藩についての基本史料となりうる重要性を持つと予想されながら、利用の便などの問題から、これまでほとんど本格的な分析が行われてこなかったことに鑑みて、調査・研究の対象としたものである。本研究では、重要と見なした冊から解読を行って翻刻データを作成するとともに、森勝蔵が明治年間に編さんした他の史料と「森家諸留」とを比較対照して、内容の重複の有無(既出・新出の別)を把握することに努めた。膨大な分量であるため、詳細な解読には至らなかった部分もあるが、重要な史料については翻刻データを作成し、全体の概要を示す一覧表も作成することができた。

については、君津市立図書館において君津市史編さん時に収集された村方史料(複写)の概要を把握するとともに、城付領の村方文書について現木更津市域および市原市域において調査を実施し、史料写真の撮影および目録作成、重要史料の解読を実施した。これらの村方文書については、廻状留・訴願関係文書・大名黒田氏の養子縁組に関する史料等を本研究に資する史料として見出した。これらの調査にあたっては、自治体等関係者の協力を得た。また一方、飛び地領の村方文書等について、飯能市郷土館(現飯能市立博物館)の協力の下、同館および藩主黒田氏の菩提寺である能仁寺において史料調査を行い、史料写真の撮影と解読を行った。

(2) 研究報告書の刊行について

本研究では、以上の成果を今後広く活用にあつては、論説編・史料編・目録編からなる研究報告書をまとめ、印刷刊行した。ここではその内容について記述する。

報告書の論説編には、久留里藩の家臣団、民政、学問、公議人(維新时期久留里藩の動向)に関連する論考を収めた。収録した論考を以下に掲げておく。

小関 悠一郎「幕末維新期の久留里藩と武士の学び」(講演録)

渡邊 茂男「久留里藩の領民支配について」(論文)

三村 昌司「公議人研究における田丸家文書の意義について」(論文)

白石 烈「久留里藩公議人田丸謙蔵(文彬)の記録と活動」(論文)

小関講演録は、本研究の諸点を総合的に取り扱った総論的な論考である。渡邊論文は、久留里藩家臣団の形成と民政の実態について、新出史料を踏まえて論じたもので、今後の久留里藩研究の一つの方向性を示していると考えられる。三村論文・白石論文は、田丸家文書の公議人関係史料を取り上げ、同史料の学術的価値を明らかにするとともに、公議人田丸謙蔵の言動を追究して、久留里藩を含めた維新时期諸藩の結びつきなどを解明した貴重な事例研究となっている。

次に、史料編には、本研究に関わる史料調査・整理作業のなかで発見され、久留里藩研究の史料として重要であると判断した史料一六点を翻刻掲載した。掲載史料の選定にあたっては、上総古文書の会のメンバーと研究代表者(小関)で打合せを重ね、掲載史料の内容別に、「久留里藩の家臣と民政」、「久留里藩の学問」、「幕末期の久留里藩と公議人」の項目を立てて重要史料を収録することとした。

各項目に収録した史料は、その史料性格を相当に異にするようにも見える。しかし、近世後期にかけては、一八世紀半ば前後に下級の役職に登用された家臣およびその子孫が、代々役勤めを重ね、代官クラスの役職に就いて久留里藩の民政を担うようになっていた。彼らは、家老クラスまで含めて家臣相互の学問的交友関係を築き、好学藩主黒田直邦以来の久留里藩における学問を意識しながら儒学等の学問を受容し民政ほかの役勤めにあっていたのである。こうして近世後期久留里藩における代官クラスの藩士たちは、民政経験や学識を背景に、家老クラスの藩士らとともに幕末維新时期における藩内外の課題に対応することになったと言える。

史料編収録史料は、このような久留里藩の学問と民政およびその担い手についての理解を深め、今後の同藩研究に資すると思われるものを選定したものである。

「久留里藩の家臣と民政」の[1]は、久留里藩家臣団研究の基礎となる史料である。[1]「久留里縣 官員士族 俸禄座順帳」は廃藩置県後の久留里県の官員士族の構成を示す史料であり、近世期の家臣団のあり方との比較対照が可能になる史料である。本研究の過程で発見された譜代重臣文書中の史料である。

次に[2]「系譜」・[3]「系譜下書」・[4]「(系譜下書)」は、千葉歴史・自然資料救済ネットワークの調査で発見され、本研究でも中心的な素材としたT家文書の中に含まれている系譜類である。同家の代替わりのたびごとに作成されたと考えられるこれらの系譜類によって、民政・学問・幕末維新期の久留里藩政に深く関わった藩士田丸家の歩みを理解することができる。[2]「系譜」は万延元年に清書されたT家の系譜の完成形ともいべき系譜である。[3]「系譜下書」は天保末年における系譜作成の下調べ帳で、清書には記載されていない記述も含まれている。[4]「(系譜下書)」は久留里藩公議人の経歴にほぼ特化して記述されたもので、明治一六年までの記述を含む。

次の[5]~[12]は、久留里藩士が代官を勤めたことに関わって作成された文書である。[5]「御米納手扣」は年貢収納の手順や書類作成の方法などが記された横半帳で、代官として必要な情報を手元に置いて参照するために使用されたものと思われる。その中に「御米納の節、持参致し候帳面の覚」として「海川船積帳」など八冊が記載されているが、その実物が[7]「高滝筋海

舟積帳」[8]「高滝筋五箇所已御年貢米永諸納物押切帳」[9]「高滝筋海川舟積帳」[10]「高滝筋海川舟積帳」[11]「高滝筋川舟積帳」[12]「高滝筋海船積帳」である。[6]は久留里藩代官の勤務日記である。[13]「御用并御廻状控」[14]「御廻状写帳」は、市原郡の久留里藩領（高滝筋）の村役人を勤めた家の御用廻状留（天保・慶応）である。

「久留里藩の学問」には三点の史料を収録した。[15]「愚案」は儒学者・太宰純（春台）の黒田直邦への建言書である。太宰春台と久留里藩の関係については、好学藩主だった直邦による春台招聘が知られ、直邦の墓誌・墓碑銘は春台の撰になるものである。直邦への春台の上書としては、『日本経済叢書』六・『日本経済大典』九に収録された「春台上書」が知られるが、「春台上書」が幕閣としての直邦に向けたものであるのに対して、「愚案」は藩主としての直邦に宛てたもので、藩の制度を確立することの重要性などが説かれている。「愚案」は複数の写本が家臣や村役人層の家に伝えられており、春台の意見が「黒田家御条目」（享保二〇年）をはじめとする久留里藩（沼田藩）政に与えた影響とともに注目される。[16]「琴鶴君治教略論」は、内閣文庫所蔵本の奥書（元文三年、藤原泰貴）に基づいて享保一八年頃の成立とされ、これまで福井久蔵編『秘籍大名文庫』一（厚生閣、一九三七年）に翻刻収録されて知られている。ここでは家臣団における黒田直邦の著作の受容の一例として翻刻収録した。なお、秋山高志「下館藩主黒田直邦と祖徠の学」（同『水戸の文人』ペリかん社、二〇〇九年、第十三章）参照。

[17]「久留里藩学制沿革概録」は『日本教育史資料』の旧久留里藩に関する記述の原稿とされる史料である（神邊靖光「久留里藩学制沿革概録」と『日本教育史資料』の記録、『兵庫教育大学研究紀要』一三、一九九三年）。久留里藩の学問に関して最もまとまった史料であるとも言える。これまでは、『房総郷土史料』七九～八四（一九三八年、千葉県立図書館等所蔵）に分載されたものが利用されてきたが、本研究に深く関わる史料として、久留里城址資料館に収蔵された原本に基づいて今回翻刻することにしたものである。これにより、今後の内容の精査と活用が期待される。

「幕末期の久留里藩と公議人」には六点の史料を収録した。[18]「記録書抜」は幕末期の家老勤めとの関係で残されたものと思われる。明治元年（慶応四年）正月～九月の東海道総督府等からの達書や黒田氏からの請書・伺書などが収録されており、幕末期の久留里藩の動きを考える上で重要な史料となる。[19]～[23]「見聞私記一～三」、「（公用留）」については久留里藩の公議人史料である。

目録編では、「森家諸留」の内容を紹介するとともに、田丸家文書目録を収録した。なお、同目録は、二〇一五年度以来、千葉大学教育学部日本史研究室、千葉歴史・自然資料救済ネットワークとの協力の下、作成を進め、本研究で取りまとめたものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小関悠一郎	4. 巻 846
2. 論文標題 江戸時代の「富国強兵」論と「民利」の思想	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小関 悠一郎	4. 巻 813
2. 論文標題 江戸時代の政治と武士の学び	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小関悠一郎	4. 巻 40
2. 論文標題 幕末維新期の久留里藩と武士の学び	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 久留里城址資料館年報	6. 最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小関悠一郎
2. 発表標題 近世中後期における藩政理念の展開と変容
3. 学会等名 シンポジウム「熊本藩からみた日本近世 比較藩研究の提起」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小関悠一郎
2. 発表標題 幕末維新期の久留里藩と武士の学び
3. 学会等名 久留里城址資料館平成30年度企画展関連講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小関悠一郎
2. 発表標題 近世日本における「富国強兵」をめぐる議論 19世紀初頭の幕藩政治史・儒学受容との関連
3. 学会等名 第20回日韓歴史共同研究シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小関悠一郎，上総古文書の会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 科研費成果報告書	5. 総ページ数 339
3. 書名 久留里藩における藩政運営能力の形成と蓄積	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----